



設定

いじめっ子、いじめられっ子、その友人の3人をメインとした男子校でのいじめ、羞恥系メインのお話です。いじめられっ子、尚の視点をメインに描いています。

登場人物

佐藤 晃一(さとう こういち)17 歳 野球部・三年

曲がったことが嫌い。いじめを見過ごせない。尚の中学からの同級生。黒田に弱みを握られ言いなりにさせられている。

黒田 了(くろだ りょう) 17 歳 野球部・三年

支配欲が強く、弱い立場の人間を見下す。晃一の正義感を「偽善」「うざい」と嫌っていた。いじめていた尚を利用し、晃一を言いなりにした。

佐々木 俊樹(ささき としき) 17 歳 サッカー部・三年

黒田の友人。いじめに加担している。

三浦 尚(みうら なお) 17 歳 帰宅部

体が細く、運動は苦手。自分の意見をはっきり言えない。晃一を毘にはめ、黒田の下僕とするのに協力した。

道具

大きな公園の奥、歩道からわずかに外れた場所に、その小さな空間はあった。周囲を取り囲むように低木と若い木々が密集している場所。枝葉は無秩序に伸び、視線を遮る壁のようにも見えるが、中心だけは不自然なほどひらけていた。

その場所に立つと、葉の隙間から公園の通路が見えた。犬を連れた散歩客や、ジョギングする人の影が、緑の向こう側を静かに横切っていく。

一方で、通路を歩く側からこの場所を見ると、事情は違う。歩道沿いに連なる草木は一続きの塊として目に入り、その奥に空間があることまでは分からない。視線を意識的に向け、葉の重なりを丁寧に追わない限り、そこに人が立っているとは気づきにくいだろう。

黒田と佐々木に連れられ、日曜の昼間にその場所を訪れた尚。もちろん晃一も一緒だ。尚はこの場所に来ると記憶がよみがえる、、自分がいじめられていたときの記憶が、、、。

「おい、早速服脱げよ、ハジチュー。」

「はい、、、。」

晃一は二人に対して敬語を強いられ、それも大分いたについてきている、、、それでも頑張った方だと思う、、。あれだけ、侮辱され馬鹿にされ痛めつけられても、晃一はすぐにはおれなかったのだから、、。

晃一が服を脱ぐといつももの白のブリーフを履いている。いつもと違うのはそ

の白のブリーフの内側が丸みをおびておらず、ゴツゴツとしていることだ。

黒田の命令でブリーフをずらすと、晃一の股間につけられている貞操帯があらわになる。

「どうか、、はずしてください、、もう一週間です、、。」

「それはお前次第だな。今日もがんばって玩具になって俺らを楽しませろよ、、。」

「はい、、。」

苦しそうな晃一に尻を出させると、黒田の指示で尚がその尻の中に浣腸液を注入していく。一本、、二本、、、三本、、四本、、、。時間がたつにつれ、うめきだす晃一を二人は笑っている。

「と、、トイレに、、いかせてください、、お腹が、、、お腹が、、痛いです、、。」

「ははは、、行かせるわけないだろ、、お前は犬と一緒に野外で糞すればいいんだよ。」

「そ、、そんな、、、、お願い、、です、、トイレに、、。」

「うるせえよ、あんまり騒ぐと歩道にいる人間に気づかれるだろうが。おい、尚、ハジチューはどこでするべきか教えてやれよ。」

「、、、、トイレなんて行かせない、、外でしろ、、。」

「だとよ。」

晃一はその尚の言葉に、腹痛に、顔をゆがめながら、しゃがみこんでいる。

「く、うう、でる、、、っでちまう、、、ちくしょう、、ちくしょう、うう、、、。」

ぶううぶりいいぶりいぶりぶりぶりいいいい、、、ぶううぶほっ、、、ぶりぶりぶり、、、。

「はははは、ハジチュー初野ぐそおめでとう！これでお前も立派な犬の仲間入りだな。おい、尚、汚いからこいつの尻の中、これで洗ってやれよ。おい、ハジチュー四つん這いになれ。」

そういつて渡されたポンプ式の水鉄砲のようなものに用意しておいた水をいれ、晃一の中に再度いれていく。

「ぐう、、、うう、、、うぐ、、、うう、、、。」

（晃一、、恥ずかしいだろうな、、こんな無様な姿見られて。それにしても、、本当に無様だ、、、、。）

何度も出しては入れてを繰り返され、晃一は精魂ともに尽き果てた様子だった。しかしそんなことで解放されるわけもなく、次に尚に渡されたのは今までよりも大き目の、人間のペニスを模したディルドだ。それを晃一のアナルにねじ込んでいく、、、今後も二人を満足させられるように、尚がその準備をしていく、。

じゅぽじゅぽ、ぬぷぬぷ、じゅぽじゅぽ、ぬぷぬぷ、、、。

「うう、、ぐう、、うう、、あ、、う、、、うう、、、。」

「あれ、ハジチュー感じてきてるじゃん。お前のちんぽ貞操帯の中でびくついているぞ。ケツマンコいじられるの本当に好きだよな、お前、ぎゃはははは。」

勝ち誇ったように笑う黒田の声がその空間の中で広がっていく。晃一のこの間まで極小だったそのアナルは、今は大きな棒状のものをくわえ、飲み込んでいる、、、。

尚がいったん抜こうとすると、晃一のその肉壁はしっかりとその棒にまとわりつき、はなすまいと必死になっているようだ、、。晃一がこんなことをされて喜んでいるとは思わないが、それでも前につけられた貞操帯が動き、かちゃかちゃと立てている音は、晃一の本心をあらわしているような気がした、、、。

「ぐふ、、うう、、うう、、ふう、、うう、、貞操帯、、はず、、して、、ください、、、。」

「はは、苦しそうだな、、、そうだな俺らを満足させられたら外してやるよ、自分のケツマンコで俺らに奉仕しろよ。さきに俺らのちんぽ立たせてからな。」

ニヤニヤと笑ってズボンを下げ自身のペニスを出して立っている黒田に近づくと、晃一は覚悟を決めそれを自らくわえていく。

ぺろぺろぺろぺろ、、じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ、、ちゅぽちゅぽ、、。